

近世の祇園社の景観とその周囲との接続に関する研究*

Landscape of Gion-shrine & Juncture with Surroundings in Edo Era*

出村嘉史**・川崎雅史***

By Yoshifumi DEMURA**・Masashi KAWASAKI***

1. 研究の目的

日本において丘陵地・山辺は、その場所的な優位性によって、古くから好まれてきた生息適地であると言える。しかしながら近年には、都市が拡大し開発が都市近郊の山辺に至る中で、各地で計画性のない、あるいは思慮を欠く開発が進められて醜悪な景観を残す例が後をたたない。一方で京都では、都市に極めて近い山辺を有し、あるまとまった大きな領域で山とまちのバランスを慮りながら丁寧に開発された佳良な景観が多く見られる。

本論は、現在も京都の景勝地である、八坂神社の前身にあたる祇園感神院（祇園社）とその周辺を対象として、近世における周囲の街の形成と併せて培われた境内外の景観の構成と、その接続を明らかにする事を目的とする。

2. 対象地の地理的特異性

祇園社（今の八坂神社）の起源については諸説あるが、いずれにしても古代には祇園感神院という神仏習合の社であり、特に10世紀末から近世が終わるまでは天台宗延暦寺に属していた¹⁾。祇園社は古くから、祇園会などの信仰を通して鴨川を挟んで対する洛中と深い関係を持っていた。

この領域の位置は、図1に見るように東山連峰の禁の中でも、とりわけ市街地の方へ突きだした崎にあたる。社自体は南向きであるため、はじめ門前が南側へ開いて発達したが、もう一方で直接市街地へ向く西門が重要視され、西門の前にも門前町のような賑わいが発達した。

祇園社の領域は概ね、二軒茶屋を含む門前の領域と、広い境内、そして境内の裏に当たる北林（祇園林）の3つの部分と、その全体の東に位置する三院七坊の宿坊から成ると理解される（図2）。各部分がそれぞれ異種の周囲へ開かれており、それ故に場所の性格が異なっていた。

鴨川から東山へ続く断面（図3）を参考にすれば、景勝地と町が接するところに存在した祇園社の地形的特徴を理解する事ができよう。

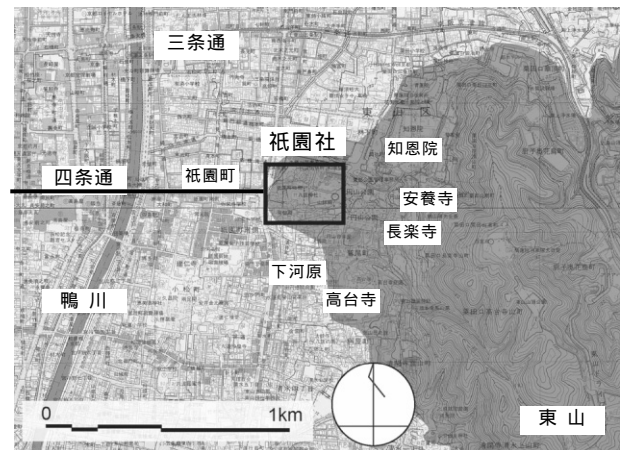


図1 東山から市街地へ突きだした祇園社



図2 祇園社の門前・境内・祇園林（花洛名勝図会）

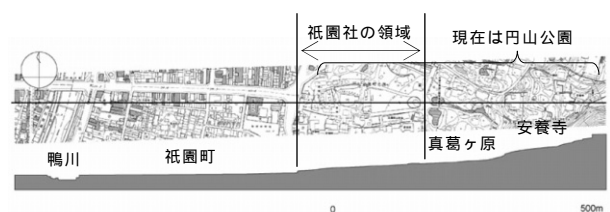


図3 祇園社周辺の地形断面（境内を通り東西の断面）

*キーワード：祇園社（八坂神社），山辺の空間構成，接続

**学生員，工修，京都大学大学院工学研究科

（京都市左京区吉田本町 TEL:075-753-5123

e-mail:n50461@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp）

***正会員，工博，京都大学大学院工学研究科

3. 門前：まちとのつながり

(1) 祇園社樓門と二軒茶屋

祇園社の正面は南向きであり、従って門前も南側にある。この祇園社門前から、清水にかけての一带は、近世の始めから「遊女かましきもの」が商売をする遊興施設が点在しており²⁾、特に高台寺門前から祇園社門前までは、下河原と呼ばれる花街であった(図4)。花街とはやや趣を異にするが、この賑わいと連続して、南の鳥居の内側(門前)に二軒茶屋が繁盛した。

近世においてこの門前空間を形づくる要素は、参道を挟んで向かい合って建つ二軒茶屋と、樓門と鳥居である(図5)。この空間構成は極単純なものであったが、現在の門前から推察できるように、囲まれた空間は広場的な働きをしており、その規模は幅6間程度である。ここの名物は「祇園豆腐」といわれた豆腐の田楽であり、『十国巡覧記』に「豆腐アカマエダレ名物也。彼麗婢紅前垂して田楽を勧め、旅人を牽。豆腐を剪に操刀の速なり。神妙実に人を脅かす斗也³⁾」と描かれているように、芸を見せて客引きをする事も行われていた。

このように、二軒の掛茶屋による演出により、門前の空間は賑わった。本居宣長の『在京日記』には、二軒茶屋に立ち寄った記述、あるいは人が多すぎて寄りなかつた記述などが多く書かれており⁴⁾、また『花洛名勝図会』に描かれた祇園社境内に「秋知らぬうちわの音や二軒茶屋⁵⁾」と門前の賑わいを描写した歌が添えられた。この門前空間そのものが、一つの名所として知られていた事が分かる。

(2) 西門と祇園町

西門は、当時も現在とほぼ同じ位置にあり、現在と同じく洛中へ向き、四条通はこの門前から真っ直ぐ洛中へ伸びていたが、これは江戸の初期には幅三間に満たない畦道で、鴨川に架かる仮設の四条橋から祇園社南門前の二軒茶屋の灯が見通せるほど閑散としていたという⁶⁾。ここに新町が出来たのは鴨川の治水と関係があった。

洪水の度に流路を変えていた鴨川に、寛文8年(1668)石垣護岸が築かれて、その後の治水が角倉了以に任されると、河川と町地との区別が明確にな

った⁷⁾。これを期に寛文10年(1670)に鴨川東沿いに外六町が開かれ、やがて正徳3年(1713)には内六町が開かれて、四条河原から祇園社までが一続きの遊興地として成立した⁸⁾。

このように、祇園新地が成立すると、四条橋東詰の芝居小屋から東山の祇園社へ向かう連続した賑わいの景観(図6⁹⁾)がもて囃されるようになった。

4. 祇園社境内の賑わい

次頁の図7は『花洛名勝図会』に描かれた祇園社である。境内には大勢の人が参拝に来ている姿が描かれているが、これには江戸後期に、霊場・霊仏への庶民の巡礼が非常に盛んであった¹⁰⁾という背景

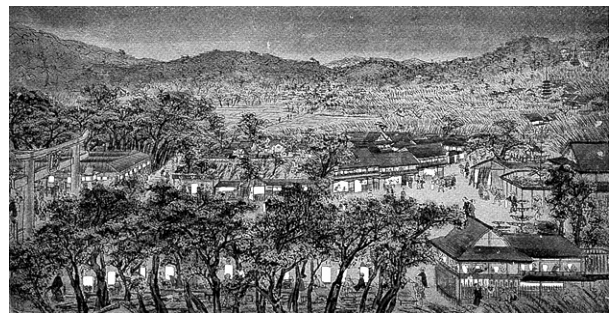


図4 門前から下河原にかけての夜景(円山応挙画)

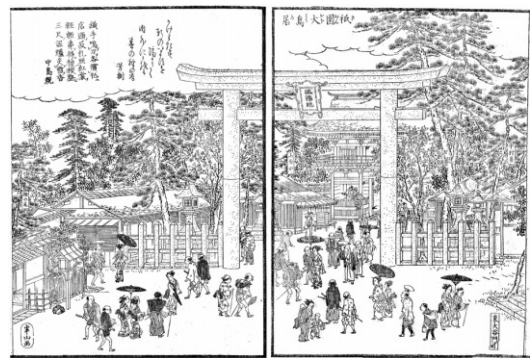


図5 大鳥居の向こうに二軒茶屋(花洛名勝図会)

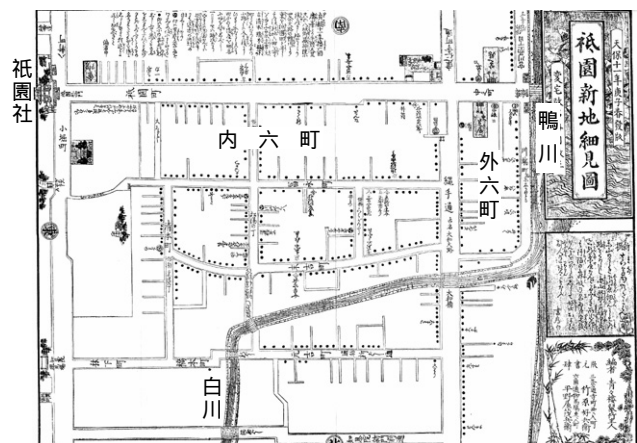


図6 天保11年(1840)の祇園新町案内(下が北)

もある。しかし、ただ参拝客が集まるだけではなく、祇園社の境内は、都市に住む人々にとっての重要な遊びの場であった。「参詣日に群集し、茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く、齒磨うりの居合抜、売菓のいひたて、うき世のものまね能狂言、境内に所せきまでみちみちたり¹¹⁾」と十返捨一九は描写したが、誇張はあるとしても大方の様子が伺える。文中の「茶店」は、先の図7の中にも複数確認できる。

この『花洛名勝図会』は1859年発行であり、約80年前の1780年に発行された『都名所図絵』に描かれた図8と比べると、若干の配置の違いは絵師の感覚によるものとしても、無くなった建築や、新しく設けられた建築が幾つかある事に気が付く。

新しくできた物として「御供殿」、「神楽舎」、「稲荷祠」がある。御供殿と神楽舎は、共に舞台の様な形態の物であり、近世後期に愉しみの為の装置として登場してきた可能性がある。そして、その他特に顕著な変化は、先にも述べたように多数の「茶店」が新しく境内に建っている事である。

境内は、本殿を中心に行き交う人々で賑わう遊興地であったといえる。

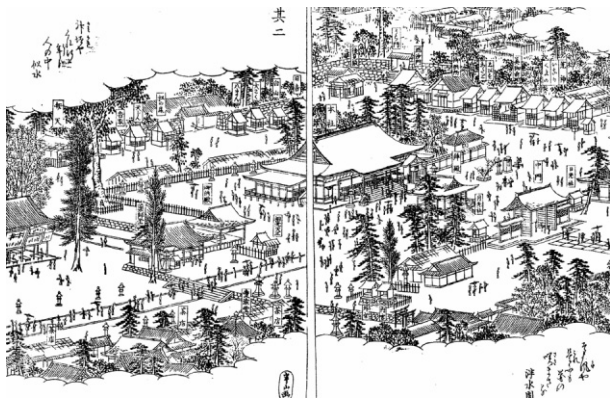


図7 八坂神社境内の様子（花洛名勝図会）

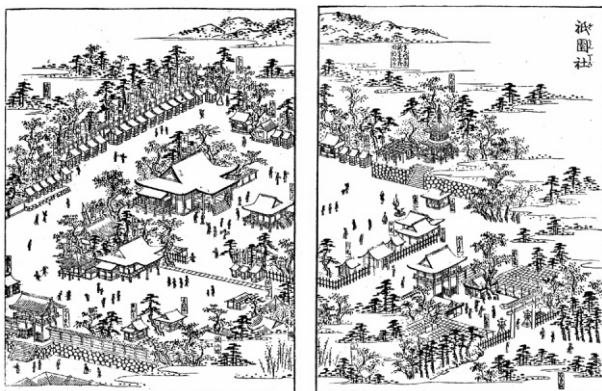


図8 八坂神社境内の様子（都名所図会）

5. 祇園林の景観

(1) 祇園林夜桜

図9は「花洛名勝図会」の絵図であるが、祇園の夜桜といわれた賑わいの様子である。この絵図に描かれているのは、祇園林と呼ばれた祇園社領内北部にあった林である。田中緑紅によると、多宝塔（境内東、寛政年間1789-1801に焼失）跡から北林にかけて桜が植えられ、成長した桜の間に茶店がたち、篝火、床机を出して賑わっていた¹²⁾という。『本居宣長在京日記』では、宝暦3年（1754）「此の冬、祇園社の北地、林を開きて之を広げ、桜を植¹³⁾」えたとされ、多宝塔炎上より古くからある事になるが、その後の祇園夜桜の盛況ぶりが絵図から伺える。絵図にみられる掛茶屋は、屋根とそれを支える柱のみからなる簡単なつくりの建築で、景色の中に透けて存在感を誇示し過ぎないものであった。



図9 祇園夜桜（花洛名勝図会）

(2) 馬場、射場、貨食家、相撲場

『花洛名勝図会』には祇園北林の賑わいが「社頭の北いにしへは雑木林なりしが、今は彼岸桜数株を植て花の頃は一しほ美観なり。この林中、借馬の馬場、大弓の射場、楊弓店、栗飯の貨食家（りょうりや）等あまたありて、遊客常に群集ひ暑寒をいとはず賑はし。又近年此所をひらき勸進大相撲を興行し大に流行せり。されば月下の風流より弓馬の調練、酒食の設けに至る迄調ひて、実に雅俗兼用して繁昌の地といふべし¹⁴⁾」と記述されている。

この勸進大相撲の跡地は、明治初期の『八坂神社境内外区別実測図』（次頁図10）に確認でき¹⁵⁾、図7の右上には弓の射場が描かれている。従って上記の記述に従えば、この周辺に馬場、射的上、料理

屋が並び、桜などの季節に関わりなく賑わっていたことになる。ここではどのような躯体で構成されていたのかは記述されていないが、図中相撲場以外は林並藪という区分になっており定着した建築物群が確認できないことから、密度の高い林中に紛れて「祇園夜桜」に描かれたような簡易な建築物が雑多に展開する遊び場の境界が形成されていたものと推測される。

6. 山辺における祇園社の位置づけ

以上のように、祇園社周辺の景観は、祇園社境内から始まる縦横の二つの経路を軸として、それぞれの門前に遊里を形成し、さらにその経路から外れて境内の北と東の奥には、林間に自由に広がる遊興空間が出来ていた。

南北方向の経路は、南へ延びて山辺に点在する高台寺や清水寺などの社寺領域とつないでいた。すなわちこのルートは、社寺巡りの観光性が高く、それ自体が市街地から離れた場所を亘る非日常性を持っていた。

一方東西方向の経路は、都心から鴨川を渡り、緩やかな傾斜に従って山へ近づき、さらに山の懐へ入る、段階的に非日常へ至る経路であった。その過程には、芝居小屋、茶屋が連なり、その奥の祇園社の存在を一層華やかなものにしていった。

これらの軸に沿って外から近づき、内に入り、核となる本殿を越えると、その裏の林は包容力のある遊び場であり、都市にとっては身近な自然の領域であった。その背後には、傾斜地に広い空地（真葛ヶ原）が存在し、山の稜線と山辺上部の遊興地を相対化して見せていた。つまり、山に対しては導入部にあたり、街に対しては鴨川東郊外に広がる遊里と一つながりのものとして認識されていた。

7. 結語

以上の分析をまとめると図 11 のようになる。近世には祇園社境内にあった南向きと西向きの二つの方向性に従って、周辺に花街が形成された。特に洛中と直接つながる西向きの門前には祇園新町が形成され、洛外の一大遊興地となった。そして境内にお

いても遊興性を培う掛茶屋などの施設が充実し、境内背後の林地では、花見を始め、多種の遊び・興行が行われた。こうして、東山の山辺下部に存在する祇園社は、山辺に広がる遊興地の一つの核としての役割を果たしていた。

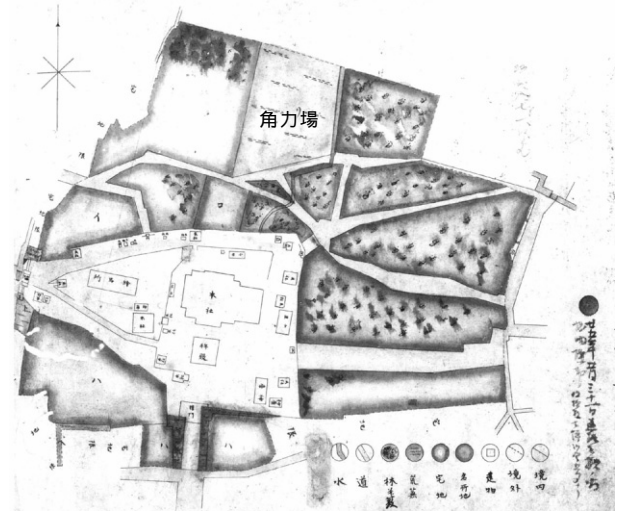


図 10 八坂神社境内外の平面図

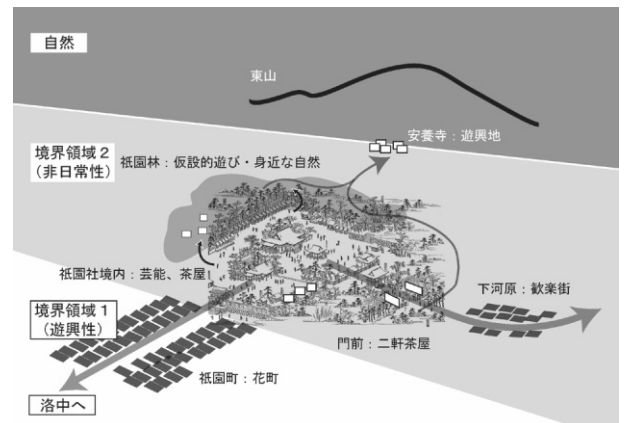


図 11 まとめ（山辺における祇園社の立場）

参考文献

- 1) 平凡社編：寺院神社大事典、平凡社、p.689-690、1997.2
- 2) 京都市編：京都の歴史 第五巻、p.476、1979.7
- 3) 駒敏郎他：史料京都見聞記三 十国巡覧記、p.134、1991.11
- 4) 大久保正、本居宣長全集第十六巻 在京日記、筑摩書房、pp.75-115、1974.12
- 5) 晴翁木村明啓：花洛名勝図会、須原屋茂兵衛、1862.9
- 6) 京都市編：京都の歴史 第五巻、p.474、1979.7
- 7) 井出時秀編、京都叢書第十五巻 京都坊目誌 下京区之部坤、京都叢書発行会、pp.298-299、1935.1
- 8) 京都市編：京都の歴史 第五巻、pp.474-478、1979.7
- 9) 野間光辰、新撰京都叢書 第十一巻上 祇園新地細見図、臨川書店、1987.8
- 10) 京都市編：京都の歴史 第6巻 伝統の定着、p.331、1973.3
- 11) 新編日本古典文学全集 東海道中膝栗毛：中村幸彦、凸版印刷株式会社、p.397、1995.6
- 12) 田中緑紅：円山公園 下、京を語る会、p.10、1960.5
- 13) 京都市編：史料京都の歴史 10、平凡社、p.179、1987.3
- 14) 晴翁木村明啓：花洛名勝図会、須原屋茂兵衛、1862.9
- 15) 図は京都府立総合資料館所蔵の京都府庁文書「八坂神社境内外区別実測図（社寺境内外区別取調42）」であるが、角力場の場所は同文書の「境内御増加願（社寺上地事件 8-39）」に明記されている。